

「情況」2018秋号(2018・10)

Record

ポスト六八革命

一九七〇年代の学生運動を語る

伊藤公雄

1951年、埼玉県生まれ。76年京大文学部卒業。81年同大学院博士課程修了。京大文学部助手、神戸市立外国語大学助教授、大阪大学助教授・教授、京都大学教授を経て、現在、京都産業大学客員教授。

六八・六九年をピークに全国の学園・街頭を吹き抜けた学生運動の熱い嵐も、七〇年安保闘争・七一年沖縄闘争を経て、党派間の内ゲバや連合赤軍事件の影響もあり、急速に衰退していった。しかし京都大学においては、竹本処分反対運動を一つの核として、独自の運動を展開し、七〇年代を通じて全国の学生運動を牽引していった。七四年から七五年まで、同学会の議長（全学闘争委員会連合議長を兼任）を務めた伊藤公雄さんに当時の京大学生運動が目指したものを、ふり返ってもらった。

同学会の再建と第一次竹本処分粉砕闘争

ぼくが京大に入学したのは一九七一年。この年の四月に

は祇園石段下で、たぶん京都の運動史上最大の機動隊との衝突がありました（京都で赤、白、青のヘルメット部隊と一緒に集会をした最後のケースだったと思います）。その後は、六月安保闘争、三里塚闘争、秋以後の沖縄返還協定をめぐる運動、さらに学費値上げ阻止（国立大学だけでなく私立大学でも値上げの動きがあり、七二年の二月には同志社大学で機動隊との大きな衝突もありました）の運動など、ほぼ連日のデモと大学占拠が続く時代でした。

一九七二年の連合赤軍のあさま山荘の時には、京大では「銃撃戦断固支持」のタテカンがだされ、後でふれる全闘連と反帝学評との共同（この2月だけの一時的「共闘」）による東一条占拠、火炎瓶闘争なども行われました。五月

には、元京大生を中心とするPFLP（パレスチナ解放人民戦線）との共同闘争＝テルアビブ銃撃戦もありました。六月には沖繩返還にともなう自衛隊の沖繩派遣阻止闘争があったし、京大では八月一五から一六日にかけて、テルアビブで亡くなった二人と訓練中に死亡した三人の京大生追悼の集会と「お祭り」（三里塚で前年行われた幻野祭の京都版）も行われた。不思議なことに、関西の学生運動は、(赤軍誕生の地であるにもかかわらず)連合赤軍の同志殺し事件に対して、東京ほどショックを受けなかったという印象をもっている。

京大の学生運動が全共闘型から同学会という自治会運動へと少しずつ変わっていくきっかけは、一九七二年のいわゆる民主青年同盟系学生による告訴・告発問題からだったんじゃないでしょうか。個人と旧同学会の名前で、まず五月に二人が告訴・告発されました(ちなみに、一九六〇年代中頃まで同学会は関西ブント系がヘゲモニーを握っていましたが、この時期、生協のスキヤンダルを契機に民主青年同盟系にヘゲモニーが移行していました)。七二年の初めに学費値上阻止闘争が闘われていて、その過程での衝突が、告訴・告発の契機となっていたんです。すでにふれたように、学費値上阻止闘争は全学バリケード闘争や百万遍の解放区闘争を展開するなど、大きな盛り上がりを見せたんですが、民青系学生はこうした動きに反対してきた。そういう

です。もつとも、教養部自治会に関しては、結局、民青系執行部は罷免したものの、全闘連系の自治会は再建されずに、今だに正式には承認されていない事態が続いていたと思います。

それから十一月二十九日には全学学生大会が開かれて、同学会の執行部を罷免し、代議員会の解散が決議されました。そして十二月二十日には、選挙を経て第一回の新たな代議員会が行なわれた。先に言った八島委員長が選ばれ、同学会が再建されるわけです。

それで、当時の京大生運動の特徴といったことに触れておくと、一つにはさっきの釜ヶ崎の例にあるように、地域に出ていくということがありました。とくに反公害運動や下層労働者に対する運動という形で、地域に出ていく。それと同時に、学内における政治的諸課題に取り組んで闘っていくというような構図があったわけです。

七三年一月には、経済学部教官協議会が竹本信弘氏の分限免職処分の評議会への上申を決定します。そこから第一次竹本処分粉砕闘争が展開されるわけです。時計台にくつきりと記された「竹本処分粉砕」の文字、あれがある意味で一九七〇年代京大生運動のシンボルだったと思います。それとこの時期、もう一つ大きな要素としてあるのは、全学臨闘争委員会(全臨闘)を中心とした臨闘の運動です。当時の学生運動の展開のなかで特筆されるものだと思

う中で、二月に無期限ストを決議しようとした文学部学生大会において、ちょっとした衝突があったわけです。学費の問題で盛り上っていたエネルギーが、学生を権力に告訴・告発するというような民青系学生の行為によって、パッと燃え上ったという感じでした。

五月に二人が告訴され、その後、確か十人くらいが続いて告訴・告発された。九月には八島久男さん(イタリア・トリノ大学数学科名誉教授)という、のちに再建同学会の委員長となる人が釜ヶ崎の地域闘争の支援活動を展開している際に、釜ヶ崎の現場で逮捕されています。さらに酒井一さん(現尼崎市議)という、文学部学生会の委員長だった人物も逮捕された。そういうことがあって、当時あった学費値上阻止全学闘争委員会連合(全闘連)各学部の闘争委員会、寮自治会、地域闘争グループなどに加えて当時学内で活動していた政治グループの連合体、いわば全共闘の後継組織ともいえる。いつの間にか「学費値上げ阻止」は消えて、全学闘争委員会連合として、一九七五年くらいまで存続した」と各学部の自治会によって告訴・告発を糾弾する運動が展開されていくわけです。

十一月十日には、教養部代議員大会で、民青系の教養部自治会執行部が罷免されています。だいたい当時は、自治会は民青系が握っているものの、代議員大会になると全共闘系の流れである全闘連が勝つという構図があったわけうんだけど、竹本処分粉砕、全臨闘の運動を進める過程で、三月に差別・分断・生活破壊と闘う全国労学交流集会というものが京大で開かれた。これは多数の労働者、労働組合、地域運動の活動家が京大に集って、学生運動と交流し合いながら一緒に運動を進めていくという方向を指し示したものであったわけです。それまでの学生運動がもっていた観念的な傾向みたいなものを克服すると同時に、「生活破壊と闘う」というようなレベルの、生活領域にまで至るような運動の方向性を示した。京大生運動がその後も、全国の学生運動が低調になるなかで、ますます力をもっていたこと、理論的、実践的な根拠の一つは、この三月の全国労学交流集会の中にあつたと思うんですね。

交流集会で示された方向の延長線上で、一九七三年四月には同学会主催で新入生歓迎連続・シンポジウムが開かれています。このシンポジウムに同学会の理論的、実践的、方向性が端的に示されていました。内容をちょっと紹介しておくと、開幕講演が字井純さん。テーマとしてはまず「現代産業社会における臨時労働者」というのがあって、これは全臨闘がやった。次に「釜ヶ崎と高橋和巳」というテーマで、これは底辺委員会という釜ヶ崎の運動と結びついているグループ。そして「列島改造と住民闘争」、これは伊方共闘という四国の反原発の運動をしていた人たち。それから全学統一救村による「弾圧網を包囲せよ」、同学会に

よる「戦後史からの証言」と続いたわけでは

そういふふうには、学生運動がそれまでもつていたアマでつかちのところを克服するような形で、地域と結びつき、反公害闘争と結びつき、生活破壊と闘う運動と結びつき、底辺労働者と結びつきながら同学生会運動というものが表現されたということは、その後の京大学生運動を展開していくうえで大きな基盤となったと思うんです。

たとえばその年の六月、そういうさまざまな運動と結びつきながら、しかも教育学園闘争を展開していくという構図のなかで、筑波大学法案粉砕闘争というものに取り組んだんだけど、教養部だけで七〇八〇人が決起するというような状況を生み出したんですね。当時、連合赤軍事件と内ゲバで学生が政治に無関心となり、学生運動が大きく退潮していたわけで、この七〇八〇人という数は、相当なものだったと思います。

そういう動きのなかで、いわゆる「清風荘密会事件」(当時、京大では令状なしの警察の学内立ち入りが大学の自治の原則から許されなかった。そのため、竹本問題の協議を警察と大学当局が、キャンパス外にある京大の施設である清風荘でおこなわれたもの。なお、清風荘は、旧西園寺家の別邸であり、日本庭園を備えた京大の迎賓館的な建物である)がありました。一九七三年六月でした。竹本処分の関連で、警察が池田浩土さんの研究室を不当捜索したもの

七三年の後半はこのほかに、京大Ⅱ「公害」発生源を糾弾する全学集会、労災職業病公害と闘う全開西活動者集会を京大で開催したり、釜ヶ崎越冬闘争の支援などに取り組んでいます。年末には前田総長が再任されずに、当時、竹本処分反対派であった岡本さんが新総長に選ばれた。

総長が再任されないというのは非常に異例な事象であつて、このことの背後には、同学生会を中心とする学生運動の力というものが、大きく作用していたと言ふことができると思います。学内世論の形成ということに関して、同学生会がかなりの力をもつていたことの証明ではないかと思う。岡本さんはその後、七四年三月に、竹本処分の評議会での審議を凍結するという宣言をして、第一次竹本処分に関しては、この時点でひとつの区切りがついたわけですね。

七四年の前半は、狭山闘争が運動の中心だったと記憶しています。そのなかで一つ触れておかなければならないのは、京大学生運動がこの年の五、六月くらいの時点で、いわゆる党派型の学生運動からほぼ切れてしまった、ということ。当時、京大のなかには政治セクトと関わりをもついくつかのグループがあって、彼らの党派性を前面に出した動きによって学内は少しギクシャクしたりするんですが、結局、それらのグループは京大から出ていってしまつたわけですね。

残った方のグループは、政治潮流としてはブント系の流

だから、教養部の学生五〇〇人が集つて、機動隊を学内からたたき出してしまった。

参院文教委の来学を阻止する

その頃、同学生会は国際機関誌を発行しています。「THE DOHCAKKA」です。英語版、仏語版で、全世界一〇〇か所くらいの大学や運動体に送付して、京大を中心とする日本の学生運動、京大が関係をもっている労働運動、地域の運動などを紹介していくという活動を続けていました。

また、この年の秋には同学生会として二名の学生をタイで行なわれるアジア学生会議に派遣したんだけど、途中で強制送還されるということがありました。このアジア学生会議に行こうということ、一つの大学の自治会として決定し、しかもそれを実行しようとしたことは、当時の同学生会運動というものが、日本全国のさまざまな運動と連携すると同時に、世界的にも運動の輪を広げていこうという、ある面で非常に健全な国際主義を掲げていたということ、これは強調しておいていいと思うんです。

田中角栄首相(当時)が一九七三年七月にタイへ行つて反日運動にさらされたり、学生反乱でタイの旧政権が倒された、というような時期でしたから、同学生会派遣団の強制送還というようなことになったんでしょね。タイや香港の新聞は、この事件を一面トップで報じていました。

れをくむんだけど、組織としては完全にノンセクトという形で、その後の京大学生運動を主導していく。その象徴が六月十五日の全京大集会で、五〇〇人が結集し、新たな同学生会運動の流れが形成されたわけですね。

その年の秋には、参議院文教委員会の京大査察が行なわれようとしてました。国会で「京大は暴力支配されている、ケシカラン。学部長室も占拠されており、きわめて異常な事態である。調査が必要だ」と、問題化したんですね。それで十月十六日に文教委が来学するという情報を十日くらい前に入手するんだけど、この頃は京大学生運動のパワーというものが若干、衰えをみせていた時で、集会をしても二、三〇〇の部隊しかつくれないうような状況だったんです。

そこで「十日間戦争」と名付けて(笑)、かなり必死の情宣活動をやりました。そのかいもあつて、十月十六日当日には、地域の労働者も含めて、確か三〇〇〇人くらいの反対集会を時計台前でもつことができました。この結果、参院文教委はトラブルを恐れて来学できない、という事態をかち得たわけです。この問題が、京大学生運動にとつて一つのカンフル剤になった、ということも言えるかと思ひます。

政治党派なみの全国闘争を展開する

その後、一九七四年十一月にフォード米大統領が来日するというので、それを阻止しようと羽田現地闘争に部隊を派遣する。そして、フォード大統領が京都へ来てそこから韓国へ行くというので、入洛阻止、訪韓阻止闘争を展開します。確か時計台前で、同学会の呼びかけで一〇〇〇人くらいの集会を開きました。

七五年に入ると、学費値上阻止闘争が大きなテーマとなりました。当時としては本当に全国でも珍しいことだったんだけど、京大では全学的なバリケードストライキ体制で闘われました。一九七六年一月二十三日に教養部代議員会で無期スト突入が可決され、四月十一日までバリストが貫徹されます。

それと、七五年というのは世界的に非常に大きな意味のある、ベトナム完全解放が達成されます。五月十日にベトナム完全解放を祝う全京都集会というのが、京都ベ平連の主催で一〇〇〇人を集めて行なわれました。当時、京大の同学会はベ平連との関係というのはいまありません。ただ、まあいいじゃないかと(笑)、確か赤ヘル部隊一〇〇人くらいで登場して、デモの先頭に立ったのを覚えてます。

七五年はまた、同学会として天皇訪米阻止闘争を、かなた。内ゲバ批判をしてきた第四インターにとって、組織的な危機を招いた事件でした。こうした学生中心による一連の全国的な闘いというものは、ほとんど同学会が医学連(全国医学部自治会連合)とともに、中心的な形で担っていたと言ってもいいと思いますね。

七六年といえば、突然、夏休み中に総長室に鉄扉と鉄格子が取り付けられ、驚かされました。これはいつた何なのか、ということ、凍結状態の竹本処分が再開されるんではないかと判断したわけですね。それで九月に、鉄扉、鉄格子を外させる運動というのを展開しました。実際にハンマーのようなもので、鉄扉を叩いて壊したりもしました。結局、岡本総長の専決ということで、学内にも反対意見が多くて、鉄格子はさすがに外されることになりました。ただし鉄扉は、一度、壊されたものの再び取り付けられてしまいました。

それから秋には、天皇在位五〇年式典に対する反対運動に、同学会としてもかなり力を入れて取り組み、全学ストライキで闘っています。

第二次竹本処分粉砕闘争

京大に初めて反憲学連が登場したのは、七六年でした。それまでも原理研究会はちよく顔を出していたんだけど、この年の十一月に反憲学連が黒ヘル姿で登場してき

り大衆的なレベルで進めています。その際、天皇の戦争責任を糾弾する在米アジア人の運動と連帯する形で、アメリカに同学会の代表を派遣し、アメリカでの来米阻止闘争も担っています。国際連帯というものを現実的な形で展開していったわけですね。京都では、同学会主催で、二九〇〇人くらいの規模の天皇訪米阻止全京都市民集会が開かれました。また、九月三〇日の羽田現地闘争には、京大から一五〇人の部隊を派遣しています。

七五年には東北大学生処分粉砕運動を支援した。京大には竹本処分粉砕闘争で培ってきたいろんなノウハウがあったもので、そのノウハウでもって、東北大でちょうど行なわれていた学生処分粉砕闘争を、指導と言ったら言いすぎかもしれないけれど、協力、経験を交流させるような形で担っていった。実際に、東北大に京大同学会のメンバーが五、六名、常駐していましたからね。もうほとんど、学生運動の核になる部分がないというような時代でしたから、京大同学会が全国の学生運動を主導する形になっていたわけです。

年が明けて七六年の二月に東北大処分粉砕闘争を支援するため三〇〇人の集会を開き、慶応大学でも七〇〇人を集めて、仙台へと乗り込んでいった。そして二月十日に仙台で一〇〇〇人の集会、現地闘争が展開されるわけです(この時、東北大の反帝学評と第四インターの衝突がありました)。全国的な学生運動の最大の拠点校ということで、向こうにすれば相当に体制を整えてからやってきた、という感じでした。それで、武力衝突が起こって、この件が元で翌年の二月、当時の鬼界同学会委員長が逮捕されています(鬼界彰男||現筑波大学教授)。

右翼と衝突した後くらいから、京大学生運動の力が急激に衰えをみせ始めます。とくに教養部の学生というものが、ほとんどもう学生運動に関心を払わないというような状態で、実際にヘルメットをかぶって運動しているのは、三回生、四回生が中心になっていました。ヘルメットアレルギーというものが相当に強くなっていたんですね。

——そして翌七七年、第二次の竹本処分問題が起こってきます。鉄扉と鉄格子が出現した時にわれわれが予想した通りになったわけで、二月の末に岡本総長が、竹本信弘氏の分限免職処分についての審議を再開すると言いつた。それで同学会として、粉砕闘争を展開していくわけですが、さっき言ったように京大学生運動のパワーが落ちてくる時期で、おまけに春休みということもあって、かなり時間をかけて集めても六〇〇七〇人程度の部隊しか集まらない、というような状況でした。

竹本処分粉砕闘争というのが、どういう位置づけのものに闘われたのかということを整理しておく、次のようになるだろうと思います。竹本氏に対する処分が行なわれ

るならば、他の大学と比べれば比較的自由な学内の空気みたいなのが、管理強化という形で圧殺されていくだろうし、当然、その前段階として、唯一、京大のみが持ち得ていた学生運動の力というものに対しても、大きな圧力がかけられてくるであろう。竹本処分とは、そうした大学の管理強化の流れの一つのメルクマールに他ならない、という論理のもとに運動が展開されたわけだ。

その運動のなかで、大きな注目を集めたのが卒業式での闘いでした。実は、全共闘運動以後京大は卒業式をしてこなかった。「正常化」の象徴としての卒業式再開でもあったわけだ。同学会としては、卒業式そのものに関して、学内世論というものを考慮して、これを潰すというような判断はやめようということになった。卒業式を大切なものとして考える学生もいるわけだから、式そのものは潰さない。しかし、処分をすると言った総長が学生に対して祝辞を述べるといことは、許せないんじゃないか、という論理で行動を起こしたわけだ。

そこで、ネクタイを締めたりして脇にはヘルメットをかかえるというようなスタイルで（笑）、二〇〇三〇人が会場に入り、最前列の席に陣取ったわけだ。そして、証書授与の間はヤジを飛ばして批判の声をあげる程度で、比較的小さくしていた。しかし、証書の授与が終わった段階で式の中核は終了したと判断し、かかえていたヘル



【写真解説】竹本処分の動きが始まった1977年3月の卒業式。同学会は卒業式の会場にヘルメットを抱えて入場し、卒業証書授与式については破壊しないという確認で、授与の間はヤジをとばし続けた。処分の議論を始めた岡本総長の祝辞は許さないということで、祝辞開始とともに皆ヘルメットをかぶって壇上に攻めのぼり、総長を拉致して外に放り出したシーン。画像左上で黒縁眼鏡にネクタイを締めている人物が院生時代の伊藤公雄。ネクタイを締めているのは、卒業式らしいというシャレだという。この卒業式の事件は当日19時のNHKニュースの冒頭で報道された。その年の入学生はただならぬ京大の様子を事前に知ることになり、4月の1000人規模の行動につながった。岡本学長は「あのときの大学院生はゆるさない」とホテルフジタでの会食のさいに公言していたが、それを聞いていたアルバイト学生から話がつたわったことで学生処分策動粉碎運動となり、処分の話は宙に浮いたという。（文責・編集部）

メットをかぶってですねえ（笑）、壇上の上つて総長の祝辞は阻止した。

これは結果的に、春以降の運動の大きなバネになるんです。というのはマスコミが大きく報道しまして、テレビほどの局もいちばんの最初のニュースとして流すし、新聞も夕刊では一面トップで大きく紙面を割いた。新人生にしてみれば、自分がこれから入る大学というのは問題が起こっている、処分問題が起こっているという認識をもっただろうし、帰省している学生たちも、あっ、京大ではやっぱり同学会が大きな運動を展開していつてるんだな、という印象をもっただろうと思うんです。

この春休みの段階で考えたのは、「ホーチミン作戦」と名付けたんだけど、大衆運動で展開していなくなっちゃいかん、ということだったんです。一〇〇〇人規模の集会を春の早い段階でやろうと、スローガンも竹本処分「反対」ということにしました。粉砕ではなくて。そして、集会、竹本処分に反対する全学集会を四月二十八日に設定するわけですが、この組織化は相当シビアにやりましたね。何としても一〇〇〇人規模の集会を実現するんだ、ということ。僕はもう、前年の一九七六年から大学院生だったんですが、みんなが全学部の学部名簿をチェックして、まるで選挙運動みたいな形で動員を図る、というようなことをやりました。

そして四月二十八日を迎えたわけですが、何とこの日は、大雨が降っていたんです。十二時から時計台前、ということとどつたんですけど、ザーザー降りでも一〇〇〇人が集まるとは思えなかった。ところが、十一時四十五分くらいになったら、突然、陽が射し始めたんですね。そして一〇〇〇人の集会が実現した。あの時、僕は最初にアジェンションをしたんですけど、「天が我々に味方した」(笑)なんて言ったのを覚えています。

それ以降は、最大動員二〇〇〇人規模の闘い、処分が行われるまで繰り広げられます。そんな京大学生運動のパワーを、朝日新聞には特集記事のなかで「学生運動のガスパグス」なんて言われていました。常時活動家八〇、緊急動員二〇〇、最大動員一〇〇〇とその記事にはレポートしてあるんだけど、実際その通りで、あの七七年の時点ですれだけの学生運動の力をもった大学など、どこにもありませんでした。

そういう大きな運動の高まりのなかで、評議会の前日、六月十七日に総長団交がもたれるわけです。我々には、勝てるという見込みがあったんですが、結果的には非常に奇妙な確約を取っただけに終わってしまいました。いろんな要素の判断のうえでそうなってしまったんだけど、総長に、最終的な処分の評決のための評議会は、学内で行なえ、という確約を取っただけにとどまった。そして六月十八日、

そこで、総長二時計台専決体制を許すな、というような運動も起こすんですが、残念ながら力を持ち得なかった。

それまで比較的保たれていた京都大学の自治、それは相対的なものだし幻想ではあるんだけど、そういうものが急速に失われて現在に至っていると思います。

なぜ七〇年代の京大学生運動だけが、全国的にみたら非常に特異な存在として、「ガスパグス」と言われるくらいに「生き残って」きたかと言うと、まず第一に、最初の方でも触れたように観念的なものではなく、きわめて実践的に運動を展開してきた、ということがあります。生活のレベルにまで至る形で、差別の問題や底辺労働者の問題、公害の問題や地域住民闘争などに積極的に関わってきた、ということですね。

それが学生の間に広く深い支持を得る基盤となり、また

八〇〇人くらいの学生が時計台を包围するなかで、結果的に処分が行われてしまった、ということですね。

この一連の流れのなかで、背後にさまざまな「陰謀」といつてもいいようなことが生じていたことが後でわかってきました。特に、岡本総長(当時)が翌年の京都府知事候補として準備されていたことや、これと結びついた京大OBグループの動きもあつたことが見えてきた。一九七八年に同学会中央執行委員会名で出されたパンフレットには、その時の状況についての分析と「陰謀」的な動きへの批判がなされています。

それ以後も評議委員に対する糾弾行動などが続けられるわけですが、翌七八年の初めに、経済学部の教官協議会が「一日も早く竹本君を同僚として迎える日がくるよう、待ちます」というような文書を発表する形で、竹本処分反対運動というものは、一応、終息をみた、ということでした。

生活レベルの問題を取り上げ、大同団結する作風があつた

それ以降の京大というのは、やはり相当、管理が強化されてきたと言えます。同学会が言っていたように、処分が為されて以降、京大の管理は急速に強まってきました。文部省の大学を再編していこうという動きもあつたわけですが、官僚がどんだん力をもつてくるようになります。

教官層の一定の支持をも呼んできた。実際、毒物たれ流し問題にしても安全センターの問題にしても、同学会が提起して運動を展開していくなかで、それを大学当局が受け容れざるを得ないような形になって、京大のいくつかの改革が為されてきた、ということがあります。つまり、アタマでつかちの学生の論理じゃなくて、きわめて実際のなレベルで、しかもいろんな人たちとつながりをもちながら運動を推し進めてきた。

そして次に、国際的な広がりというものをもつていたこと。さらに、政治路線的には関西プリント系ではあつたけれども、ノンセクトの運動であつたということ、これが大きいと思います。内部には実にいろいろな要素があるんだけど、論争を厭わず、時には殴り合いまでしながら、しかも全体としてはまとまっていこうというような作風。これ

改訂版

登記子1968を語る

【加藤登記子著】68年革命とそれが残したテーマ、反戦運動と環境保護、農的生活について、加藤登記子が熱い思いを語った40時間。全共闘運動から50年のいまこそ読み返す。上野千鶴子とのバチバチ対論収録。

800円+税

世界書院

〒101-0051 東京都千代田区
神田神保町3-11-1-502
電話：03-5213-3345

が結果的に学生運動の活性化を促したと思うんです。お互いの主張を最後まで闘わせながら、しかも大同団結していく、小異を残しながら大同につく。常にいろんな小異を生み出しながら、それが運動全体のエネルギーとなるような構図があつたと思うんです。

けつきよく、七〇年代末までは、どこの政治セクトも介入できないというか、指をくわえて眺めているというような状況が続きましたからね。そういう意味で、七〇年代というのは「京大らしい学生運動」が開いたと言えるかもしれない。

いろんな教官の手記なんかを読んでみても、七〇年代が非常に印象深いということをよく書いてある、それはやはり、京大の自治をめぐる問題がかなり大きなテーマとなつて学生運動が行われていた、ということがあるんじゃないかと思うんです。もちろん、それに対してどのような態度をとるかということはあるんだけど、仮りに無視したとしても、心の中には相当、印象深く刻まれたんじゃないでしょうか。

そういう意味で、同学会運動が教職員に対しても、京大らしいという一種の誇りみたいなものを与えていた側面もあつたように思いますね。

なお、この文章は、一九八八年に出版された京都大学創立九〇周年記念誌『京大史記』のインタビュの記録に若干手を加えたものです（特に、九〇周年記念誌ということで新入生にもわたることを考慮して、竹本処分問題時のいわゆる「陰謀」話はしなかつたのですが、今回はちよつと書き加えました。事情を知りたい方は、当時私たちが出したパンフレットを参照してください）。インタビュそのものが三〇年も前のもので、一九七〇年代を通じてほぼ全場面でそれなりに行動していた身（某京大OBのなかには、ぼくが六〇年代中期の入学だと勘違いしていた人もいるくらいだ）としては、今となっていろいろ思うところもありますが、記録ということで一部をのぞいてそのまま掲載させていただきます。